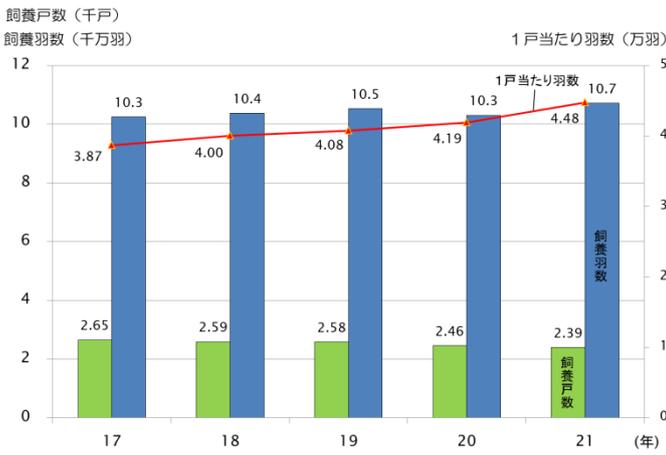


鶏肉

◆飼養動向

21年のブロイラー飼養羽数、3.9%増加

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産物流通統計」
注：数値は各年の2月1日現在、22年以降は調査終了に伴いデータなし

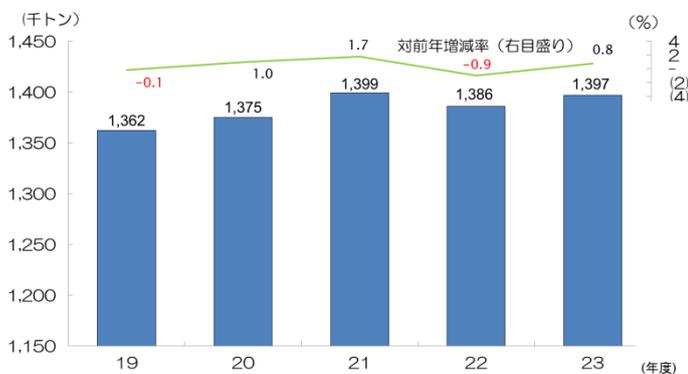
ブロイラーの飼養羽数は、19年まで増加傾向で推移した。その後、20年にはわずかに減少したものの、21年は1億714万羽(3.9%)と、再び増加した。飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向であり、21年は2,392戸(▲2.6%)と、わずかに減少した。一方、1戸当たりの飼養羽数は、増加傾向で推移しており、21年が4万5000羽(6.9%)になるなど、経営の大規模化が伺える(図1)。

※飼養動向については、農林水産省「畜産物流通統計」の中で公表されていたが、統計業務の見直しに伴い調査が終了したことから、22年以降の該当データはない。

◆生産

23年度の鶏肉生産量、0.8%増加

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食鳥流通統計」
注：骨付き肉ベース

国産鶏肉の生産量は、20年度から21年度にかけて、中国産冷凍ギョーザ事件後の国産志向に支えられ、増加傾向で推移した。22年度は、夏の猛暑の影響や高病原性鳥インフルエンザの発生により、138万6000トン(▲0.9%)とわずかに減少した。23年度は、上半期は東日本大震災の影響から前年を下回る生産が続いたものの、下半期からは回復が見られ、139万7000トン(0.8%)とわずかに増加した(図2)。

◆輸入

23年度の鶏肉輸入量、10.2%増加

輸入鶏肉は、そのほとんどが冷凍品で、業務・加工向けとして、安価で使いやすい製品が供給されてきた。20年度は、年度前半にかけて、国産鶏肉卸売価格が前年度に比べて高値で推移したことから、42万トン(16.1%)と大幅に増加した。21年度は、在庫が高水準で推移したことから、34万3000トン(▲18.3%)と大幅に減少した。22年度は、夏の猛暑によって国内生産量が減少し、在庫量が適正水準まで下がったことから、43万1000トン(25.7%)と大幅に増加した。23年度は、東日本大震災の影響によって牛肉の代替需要が高まったことから、47万5000トン(10.2%)と、高水準であった前年からさらに増加した(図3)。

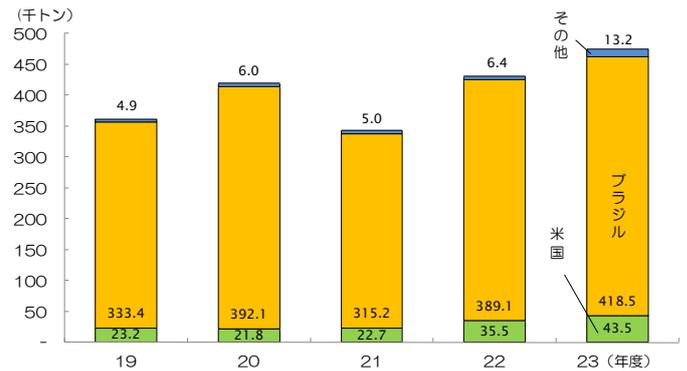
図3 鶏肉の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：生鮮・冷蔵品を除く

輸入量を国別に見ると、ブラジルが全体の約9割を占める最大の供給国である。米国からの輸入量は、17年度以降、鳥インフルエンザの発生により、たびたび輸入停止措置がとられたため、2万トン台が続いた。22年度は3万6000トン(56.4%)、23年度は4万4000トン(22.5%)と増加し、輸入量全体の9.2%を占めるまでに回復している(図4)。

図4 鶏肉の国別輸入量



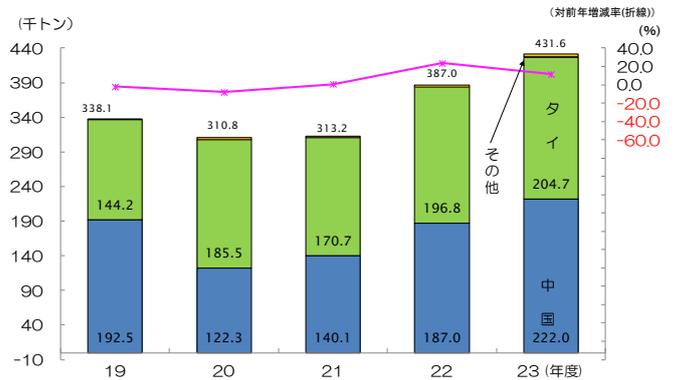
資料：財務省「貿易統計」

鶏肉調製品

鶏肉調製品(焼き鳥、チキンナゲット、唐揚げなど)は、安い素材を求める外食・業務用向けとして、主に中国、タイから輸入されている。20年度は、中国産が同国産冷凍ギョーザ事件の影響により、31万1000トン(▲8.1%)とかなり減少した。21年度は、景気低迷による経済性志向から31万3000トン(0.8%)とわずかに増加した。このうち、中国産は、同国での生産体制が徐々に整備されてきたことを受けて、14万トン(14.6%)と大幅に増加した。22年度は、中国・タイ

ともを上回ったことから、38万7000トン(23.6%)と大幅に増加した。23年度は、引き続き旺盛な外食産業からの需要を反映し、43万2000トン(11.5%)とかなり増加した。(図5)。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

◆消費

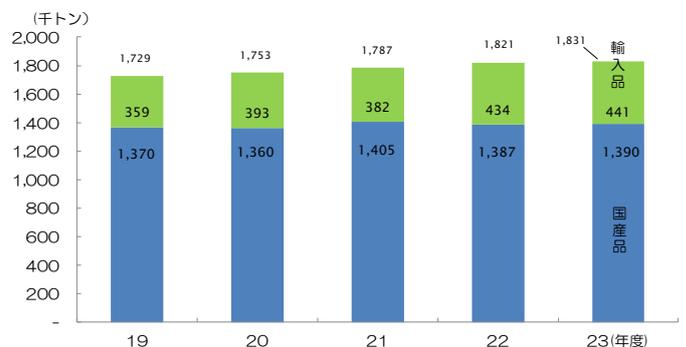
23年度の推定出回り量、0.5%増加

鶏肉の推定出回り量は、近年、年を追うごとに増加している。22年度には180万トンを超え、23年度は183万1000トン(0.5%)まで増加している(図6)。

国産品は、全体の8割弱を占めている。20年度から21年度にかけて、消費者の国産志向の高まりなどから、増加したものの、22年度は、期末在庫の品薄と国内生産量が下回ったことから、138万7000トン(▲1.3%)と減少した。23年度は139万トン(0.2%)と前年並みとなった。

一方、輸入品は鶏肉調製品との競合により、減少傾向で推移していたが、20年度は中国産の鶏肉調製品への不信感が高まり、39万3000トン(9.3%)とかなり増加した。21年度は、在庫過剰により輸入量が抑えられたことから、38万2000トン(▲2.8%)とわずかに減少した。22年度は、景気低迷により安価な輸入品への需要が集まったため、43万4000トン(13.8%)と、かなり増加した。23年度も消費者の経済性志向を反映し、44万1000トン(1.6%)と、わずかに増加した。

図6 鶏肉の推定出回り量

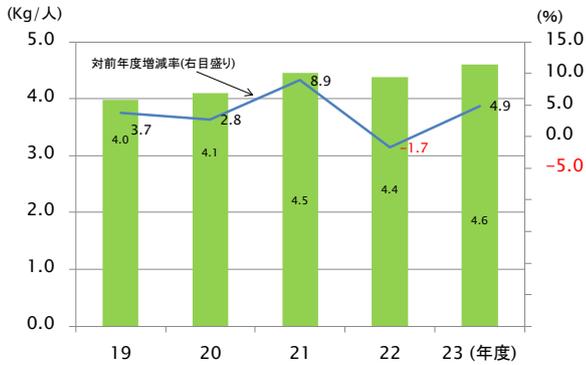


資料：農畜産業振興機構調べ、農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」

◆家計消費

23年度の家計消費量、全国1人当たり4.9%増加

図7 鶏肉の家計消費量(1人当たり)



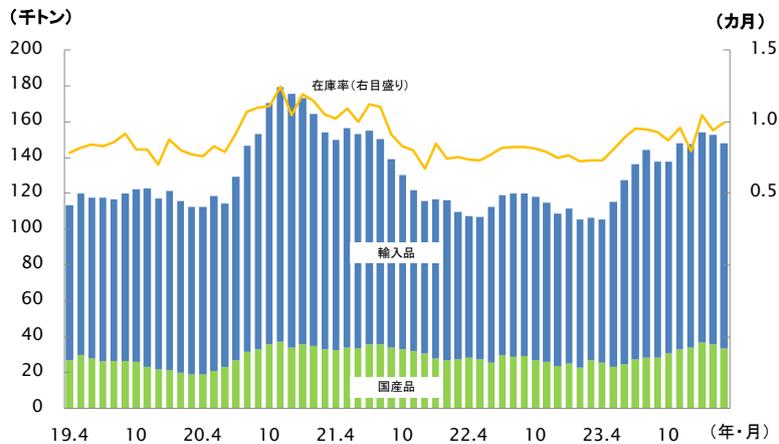
資料：総務省「家計調査報告」

鶏肉の家計消費量は、景気の低迷や低価格のメリットを反映し、堅調に推移している。20年度は1人当たり4.1キログラム(2.8%)、21年度は同4.5キログラム(8.9%)と、むね肉が例年に比べ安価だったことから増加した。22年度は消費者の節約疲れや、価格が前年を上回って推移したことから、同4.4キログラム(▲1.7%)とわずかに減少した。23年度は、引き続き消費者の経済性志向を反映し、同4.6キログラム(4.9%)と再び増加に転じた(図7)。

◆在庫

23年度の推定期末在庫量、39.0%増加

図8 鶏肉の推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注：在庫率=在庫量/推定出回り量

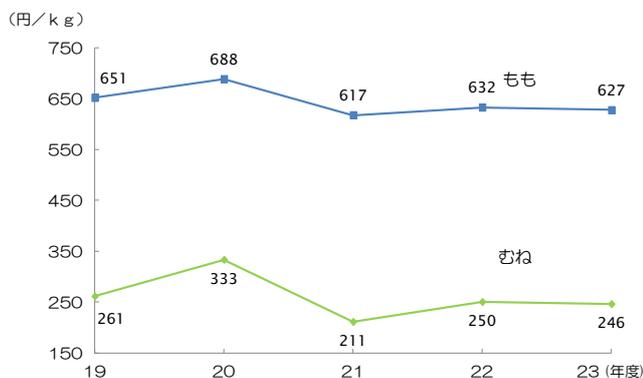
鶏肉の推定期末在庫量は、輸入量の変動を大きく反映している。20年度は、国産品の品薄感を背景にブラジル産の輸入が増加したため、15万4000トン(37.0%)と大幅に増加した。21年度は、高水準であった期首在庫量を反映し、輸入量が抑えられたため、11万トン(▲28.9%)と大幅に減少した。22年度は、輸入量が増加したものの、夏の猛暑や

高病原性鳥インフルエンザなどによって国産品が減少したため、10万6000トン(▲3.0%)とやや減少した。23年度は、生産量、輸入量ともに増加したことから、14万8000トン(39.0%)と大幅に増加した(図8)。

◆卸売価格

23年度の卸売価格、もも肉・むね肉いずれも下落(▲0.8%、▲1.6%)

図9 国産鶏肉の卸売価格



資料：農林水産省「食鳥市況情報」、「ブロイラー卸売価格」
注：消費税を含む。

国産鶏肉の卸売価格(ブロイラー卸売価格・東京)のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、20年度は、年度前半による国産志向が影響し、キログラム当たり688円(5.8%)と、やや上昇した。21年度は、景気低迷

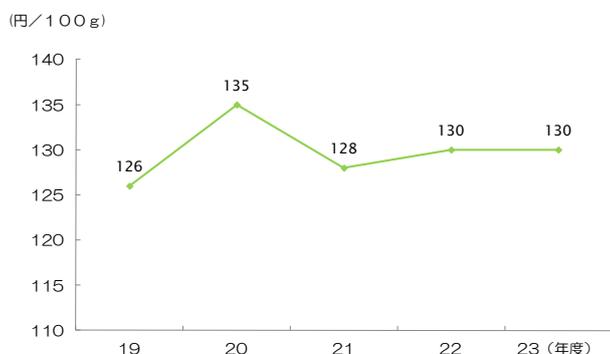
による低価格志向により、年度前半の価格が低水準であったため、同617円(▲10.3%)とかなり低下した。22年度は同632円(2.4%)と、わずかに上昇した。23年度は、下半期より東日本大震災からの回復によって供給量が増加したことから、同627円(▲0.8%)とわずかに低下した。

一方、主に加工・外食産業用途の「むね肉」は、20年度は、輸入加工品に対する食の安全性への不安感から、国産品を国内加工へシフトする動きが出たことから、キログラム当たり333円(27.6%)と大幅に上昇した。21年度は、上半期の輸入品在庫量が高水準であったことから、同211円(▲36.6%)と大幅に低下した。22年度は国内在庫量の切り崩しが進んだことから、同250円(18.3%)と大幅に上昇した。23年度は、年度後半からの輸入増を受け、同246円(▲1.6%)とわずかに低下した(図9)。

◆小売価格

23年度の小売価格、前年同水準で推移

図10 鶏肉の小売価格(もも肉・東京)



資料：総務省「小売物価統計調査報告」

鶏肉の小売価格(もも・東京)は、国産志向の影響もあり、20年度は100グラム当たり135円(6.7%)と上昇した。しかしながら、21年度は、前年度からの高い在庫水準や20年度後半から続いた価格下落を大きく反映し、同128円(▲4.8%)とやや低下した。22年度は、生産量が減少したことから、同130円(1.6%)とわずかに上昇した。23年度は同130円と、前年並みで推移した(図10)。